

『すいへいせん水平線はもう見えない』

かのうなぎ叶風生

登場人物

川下ひとし (50) 落ち目のSF作家。

菊井なぎ (32) 川下の担当編集者。

土屋三郎 (75) 部落出身の元ヤクザ。

金子 (40) 部落地区をネットにあげているユーチューバー。

森田 和子 (83) 恋人が部落差別を苦に自死。

森田の少女時代 (20)

大石 昇 (22) 和子の恋人。部落出身者。

川下の母 (45)

川下の少年時代 (18)

## 序文

この戯曲には差別用語が頻出するが、著者に差別を容認、助長させる意図はない。著者はある種の言葉を禁じ、言い変えることが、社会を変えることではないと考えている。

差別用語を使用禁止にすることによって差別が少しでも減るのなら、積極的に使用禁止にするべきであるが、現実はそのようになっていない。

「男」「女」ですら、差別意識のもとで使えば、それは差別用語となりうる。使う人次第で、どんな言葉でも差別用語になりうる。

差別から生み出された言葉は時代とともに消えていくことが望ましいと思う一方、言葉とともにその差別の歴史も消されてしまうのなら、違和感を覚える。

差別が人間社会からなくなることはないだろう。

大切なのは自らの差別意識を自覚し、各々が差別と向き合うことである。

あらゆる人種、国籍、宗教がまじりあう社会では「みんなが仲良くする」ことは不可能だ。

「殺したいほど嫌いなやつ」が隣に住んでいても、それを黙認・許容するのが、これからの「多様性ある社会」なのではないか。少なくとも著者はそう考えている。

繰り返しですが「差別」は誰の心にもあるし、差別がなくなることはないだろう。それでもほんの小さな心がけひとつで、差別を減らすことができる。

この作品がその一助になればと切に願う。

一幕 一場

時は現代。

場所は都会の雑踏。

何かに追われるように人々が歩いている。

みなスマホを片手に、下を向いている。

ある瞬間、全員がスローモーションになる。

そこにSNS上であふれているヘイト発言が流れる。

音声として流してもいいし、文字にして投影してもよい。

「エタどもに人権はない」

「在日のチョンどもは日本から出ていけ」

「ナマポは早く死ね」

「火病（フェビヨ）る」

「必要な差別はある」

「夫婦別姓を認めたら、この世の中が変わってしまう」

「パヨクどもが」

「これだから女の脳は」などなど。

ここに書かれている言葉など氷山の一角にすぎず、毎日のようにヘイト発言がメディア（おもにネット上）に溢れ、新たなヘイト言語が生み出されている。

それらのヘイト言葉をここに追加してくことを推奨する。

ヘイトの洪水で埋め尽くされたそのとき、スローモーションが解け、立ち止まる。

人々はゆっくりとスマホから顔を上げるが、その視線はバラバラである。

何事もなかったかのように早足で歩き去っていくなか、ひとり、菊井なぎだけが舞

台中央に立ち、観客たちに視線を向ける。

溶暗。

二場

どこかのファミレス。  
テーブルには川下ひとしと菊井なぎが並んで座っている。  
川下はアイスコーヒー、菊井にはオレンジジュースが置かれている。  
菊井は緊張しているようでソワソワしている。

川下 菊井さん、おちついて。

菊井 落ち着いてますよ、川下先生。私は十分に落ち着いています（腕時計を何度も見る）。それにしても、遅いですね。

川下 何言ってるの。まだ待ち合わせ時間の十五分前だよ。

菊井 そう……そうですね。すいません。あの……先生は、ヤクザが怖くないんですか？  
川下 もと、ヤクザだよ。菊井さん、相手は老人だよ。ヤクザが怖くないわけじゃないけど、無駄に怯えることもないよ。

菊井 私、そういった方と話をするのがはじめてで……。正直、ちよつとビビってます。すいません。

川下 いや、別にあやまる必要はないよ。何度か言ったけど、取材、無理につきあつてくれなくてもいいんですよ。

菊井 いえ、私、先生がこの企画書を持ち込んできたときから、できうる限りの取材についていこうと決めていたんです。

川下 そうなんですか。そういえば、僕のこの持ち込み企画を通すために、編集長に直談判までしてくれたそうですね。ありがとうございます。

菊井 ……編集長のくせに口が軽いってのは問題ですね。直談判って言っても、編集者がたった三人しかない弱小出版社ですから。私、新卒でこの出版社に入社して今年で十年になるんです。それでその十年の節目に、なんかいつもとは違う本を出す挑戦をしたくって、ずっと悩んでたんです。そこにちょうど先生が企画書持って現れた。……天のお告げだと思いました。

川下 いやあ、何十社も断られた企画だったんですよ、実は。拾ってくれた菊井さんには感謝してます。

菊井 正直な話、私自身も断られて当然の内容だと思いました。売れる要素もまったくないですし。

川下 ……（ストローをくわえ、アイスコーヒーをすする）返す言葉もありません。

菊井 同和問題を中心軸においた差別と分断を描いた小説って……しかも、熱い思いだけが書かれた企画書で肝心の内容は物語のプロットすらない。これじゃあ、企画書として未完成もいいところ。通るわけがないし、通す気がないとすら思いました。

川下 ここまでズバツと言いついてくれると、逆に清々しい気分になるよ。ほとんどの出版社は定型文のお祈りメールがくるだけだったから。

菊井 これから一緒に本を作っていくのに、へんな付度は邪魔なだけだと思ひまして。先生も遠慮は無用です。

川下 じゃあ、聞くけど、そんなゴミみたいな企画を、なんで編集長に直談判してまで出版を取り付けてくれたんですか？

菊井 それは……いくつかあります。ひとつは、先生がベテランのSF作家だったということ。『グッドモーニング、エウロパ』『宙(そら)の三毛猫』は私の中学生時代の愛読書でした。そんな昔に懂れていた作家さんと一緒に本が作れたらいいな、と思いました。川下 その二冊が僕の作家生活の中で一番売れた本だからねー。あれからもう二十年近く経つのか……。

菊井 歳の話はやめてください。

川下 おお、ごめんごめん。過去の栄光を思い出して、つい……。あれ以降、新作が年々売れなくなってる、ここ三年ほど小説の執筆依頼はゼロなんだよ。

菊井 そうなんですか。私も全部は拝読していませんが、それなりの習作はあったと思いますよ。

川下 うーん。自分でも「上手く書けてはいるけどさほど面白くはない」って感覚はあったんだ。ネタのパンチの弱さを技術で補ってるって感じ。

菊井 それで、今回は脱SFを試みたんですか？

川下 いやもうさ、SF作家にとっては恐怖の時代じゃないかな、今の日本は。某首相暗殺事件やウクライナの戦争なんてさ。完全にフィクションを超えた話だよ。編集者と打ち合わせしていても「それはあまりに荒唐無稽です」って言われるレベルのネタだよ。それが現実に起きていて、そこに僕たちは生きている。こんな状態でSF小説を書く意味が見いだせないよ。

菊井 日本がカルト宗教団体に影で操られてるって、中二病の世界設定でもんね。しかもその教団に吸い上げられた日本の血税がミサイルになって飛んできてるって……。もう笑うしかありませんよ。笑えないですけど。

川下 そんな状況下でも国民の大半はそれを受け入れるどころか歓迎しているなんてさ、もうジョージ・オーウェルも真つ青だよ。

菊井 受け入れているっていうよりかは無関心なんですよね。それが逆にディストピア感を煽るんです。

川下 こんな現実世界で、SFなんて書いてられないでしょ。というか、作家として、もつと書かなくてはいけないことがあるのでは？ そう思っただよ。

菊井 そうですよ。その気持ち、よくわかります。

川下 それで、他の理由は何なの？

菊井 え？

川下 企画を通した理由さ。僕が過去に多少は売れたSF作家だったってこと以外に。

菊井 ええと、それはですね……企画書に情熱を感じました。

川下 さつきはボロクソ言ってたのに？

菊井 それは持ち込みの企画書としての話です。でも、その中には「これを書きたいんだ」という強い熱意は込められていました。

川下 他には？

菊井 ええと……。

川下 菊井さん、大事なことを隠してるでしょ。

菊井 え？ あ……はい。

川下 言いたくないなら別にいいけど。

菊井はオレンジジュースを一気に飲み干す。

菊井 二年前、今から三年前、叔父が亡くなったんです。

川下 ……。

菊井 どこか影のある人で、親戚一同が集まる中でも、なんとなく距離の置かれている人だったんですが、私には優しくとても大好きな人でした。私が出版社に就職が決まった時も誰よりも喜んでくれて……。

川下 ……。

菊井 叔父は昔、一流企業に勤めていたらしいのですが、三十代半ばで会社を辞め、どういうわけか四十代は大した仕事もせずにブラブラしていたそうです。五十歳で小さな食品工場に再就職し、定年までそこで働いていました。私にとって叔父はお菓子工場の人でした。

川下 ……。

菊井 叔父の葬儀で……私、はじめて知ったんです。叔父が一流企業を辞めたのは、急に解雇になったのは、同和差別のせいだったってことを。

ここで少しの沈黙が流れる。

川下がアイスコーヒーを飲み切る。

くわえたストローから「ズゴゴゴゴ」という音が響く。

川下 飲み物、何か取ってこようか？

菊井 ……マンションを買ったことが原因だったそうです。新築なのに格安のマンションを、叔父はどうして安いのかという理由を大して考えもせずに購入し、引越しました。そのマンションは同和地区に建てたものだったんです。それが格安の理由の全てでした。そして叔父は、同和地区に引越したという理由だけで会社を解雇されました。はじめは、言っていることの意味がわかりませんでした。どうして人事部の偉い人たちがそういった思考回路になるのか。そういった行いを正しいと思っているのか……。どれだけ考えても私にはわかりません。やがて、こみ上げてきたのは理不尽な差別への怒りでした。百歩譲って、いいえ、百万歩譲って、同和地区出身の人間だから解雇というなら、まだ少しは理解できます。同和地区と知らずに引越しても解雇って、差別を助長しているとかいう以前の問題だと思いました。どれだけ考えても、その理由が、その意味がわかりませんでした。それと同時に同和地区に生まれた人間が受けた差別を少しでも理解できました。なぜあんな激しい「糾弾闘争」を選んだのか。私、その時まで「同和問題」なんて他人事で、言葉だけは知っているという存在でした。まさかこんな身近に当事者がいたなんて思いもしませんでした。

川下 何年代ぐらいの話なのかな？

菊井 そうですね……九十年代ぐらいの話だと思います。その話を聞いてから、心のなかにずっとモヤモヤが残っていました。叔父がどういう気持ちで生きてきたのか、少しでも話を聞きたかったと思いましたし、今まで他人事だと思い、同和問題や差別問題に目を背けてきた自分を恥じました。

川下 恥じる必要なんてないよ。

菊井 先生の企画書を見たときに、「これだ」って思いました。私が求めているものがここにある気がしたんです。私は自分自身の答えを探すために、先生の企画を利用したんで

す……すみません。

川下 飲み物、取って来るよ。オレンジジュースでいいかな？

菊井 はい。ありがとうございます。

グラスを持って立ち上がる川下。

川下が袖にはけたの入れ替わりに土屋三郎が入って来る。

土屋は片足が悪いらしく、杖をつきながらゆっくりと歩いてくる。

あたりを見まわしている土屋の姿に気づく菊井。

立ち上がり、土屋のそばに歩みよろうとするが、勇気がでない。

何度か逡巡したあと、意を決して立ち上がる。

菊井 あ、あ、あの、失礼ですが、土屋三郎さんでしょうか？

土屋 ああ……（鋭い眼光で射貫きながら）あなたは？

菊井 あの、わたくし、詠春文藝社で編集をしております菊井なぎと申します。

名刺をポケットから出そうとするが、うまくいかない。

そこへグラスを持った川下がやってくる。

川下 ああ、土屋さんですね。はじめまして。この前お電話で少しだけお話をさせていただ

きました、作家の川下ひとしです。取材、受けていただいてありがとうございます。

土屋 あんたが……作家先生か。

川下 先生なんてよしてください。どうか、名前で呼んで下さい。さあ、どうぞこちらに。

土屋 おお。

川下、土屋をテーブルに案内する。

菊井も座り、メニュータブレットを土屋の前に差し出す。

菊井 何か食べられますか？ なんでも好きなものを頼んで下さい。

土屋 こういうものの使い方は、俺にはよくわからねえ。姉ちゃんがやってくれんか。…

…飲み物だけでいい。

菊井 わかりました。じゃあ、ドリンクバー、頼んでおきます。私、飲み物取ってきます。

何がいいですか？

土屋 コーヒー。ブラックで。

菊井 わかりました。

菊井、立ち上がって袖にはける。

川下、懐から封筒を取り出し、土屋の前に差し出す。

川下 こちら、先にお渡ししておきます。出版社からではなく、僕個人から出ているもの  
ですの。

土屋 ……ん（封筒を受け取り、ポケットにねじ込む）。

菊井 お待たせいたしました。どうぞ。



菊井がコーヒーを持って戻って来る。

土屋 ありがとな、ねえちゃん。  
菊井 いえ。どういたしまして。

土屋 それで、何を話せばいいんだ？ たいして面白い話なんてできねえぞ。

川下 土屋さんのこれまで歩んできた人生を話してほしいんです。

土屋 人生ねえ……。なんかこつ恥ずかしいな。

川下 録音、させていただけます。

川下、レコーダーを取り出してテーブルの真ん中におく。

川下 ではまずはお名前と年齢を教えてください。

土屋 土屋三郎。七十五歳。

川下 どの生まれですか？

土屋 海のねえ、山しかねえ田舎町だ。何もねえ、何もかもが腐りきった場所だよ。まあ、景色だけはよかったかな。

川下 ご両親は何をしている人ですか？

土屋 食肉関係の仕事だよ。というか、俺の生まれ育った場所は、その仕事しかなかった。カワタ者だよ。

川下 特殊部落出身ということでしょうか？

土屋 ああ、そうだ。小さいころからエタだヨツだのといじめられたよ。

川下 生まれ故郷には何歳までいたんですか？

土屋 中学までだ。卒業と同時にとび鳶見習いとして町に出て、住み込みで働き始めた。でもすぐに辞めちまった。

川下 それはなんでですか？

土屋 仕事が馬鹿みたいにキツイうえに、そこでもカワタもんだって、馬鹿にされてよ。毎日喧嘩三昧よ。でも、鳶職人は腕つぶしが強くて、まったく勝てねえ。どこに行っても馬鹿にされ、唾を吐きかけられる。それが悔しくて、ムカついて、誰かれ構わず殴り掛かる日々さ。そのうち悪い仲間ができればじめて、仕事もさぼるようになった。そこで

知り合ったヤクザもんに誘われて、さか盃あ交はわして任侠の世界に入ったのよ。

川下 それは何歳のときですか？ 入った組はどのくらいの規模だったんですか？

土屋 はつきりとは憶えてねえけど、十七、八のときだったと思う。入った組は山口組の末端の四次団体。十人もいないすごく小さな組だった。だがな、あの時代、ヤクザが一番ヤクザらしく威張っていられる時代だった。肩で風切って歩いたもんよ。

菊井 それは、いわゆるバブルの時代ですか？

土屋 俺がヤクザの盃を交わしたのが、二十五歳の時だ。よく覚えていないが七十年代だったと思う。

川下 そうですね。その時代であっています。

菊井 あのこと……失礼な質問だと思いますが、ヤクザになってよかったですか？ 世間後ろ指をさされる人間になることに抵抗はなかったですか？

土屋 ははは。今の人から見れば、そう見えるのかもしれないねえな。

菊井 それは、今と違ってヤクザはみんなに愛されていたってことですか？

土屋 違う違う、まったく違う。今も昔もヤクザはヤクザ。社会のあぶれ者さ。

菊井 じゃあ、なんで……。

土屋 あんなには、逆立ちしたってわからねえだろうよ。当時の部落もんが受けるひでえ扱いをよ。人間扱いなんてしちゃくれねえ。俺たちカワタもんには人権なんてなかったんだよ。どこにいつても、どんなに頑張っても決して認めてくれやしねえ。でも、ヤクザになった途端、そんな犬畜生と同じような扱いがピタリとやんだ。誰も俺を差別しなくなった。俺をひとりの人間として扱ってくれるようになった。それが俺がヤクザになった理由だよ。ヤクザにならなけりや、俺は人間として認めてもらえなかった。

菊井 ……そうだったんですね。

土屋 当時のヤクザには在日朝鮮人と部落もんがたくさんいた。ほとんどは俺と同じ理由でヤクザになった連中さ。

川下 ヤクザになった土屋さんは、何のシノギをされていたんですか？

土屋 俺の入った組のシノギは賭場とばと的屋ていきや。ヤクザとしちやあ、まともなシノギだった。的屋の仕事は性に合っていて、それなりに楽しくやっていた。けど、世の中がバブルになって、俺の組も闇金をはじめてよ。そりやあ、バカみたいに儲かったけど、そのぶん荒事も多かった。ある日、闇金業者同士の島争いがあったよ。そこで乱闘になったときにドスで人を刺しちまって、殺人未遂で十年ムシヨに入った。

川下 ……。

土屋 ムシヨから出てきたら、すっかり世の中が変わっちまってよ。バブルははじけてるわ、暴対法が出来てるわで、そこから転落の一途よ。

菊井 確かに……十年は長いですよ。

土屋 昔の馴染みを頼って、また的屋に戻ったんだけどよ。どんどんヤクザとして生きていけなくなっていく。まるで昔に戻っていくような気分だった。ヤクザというだけで仕事を奪われ、ヤクザを名乗ることもできず、あげくの果てにはアパートも借りられない、銀行口座もつくれない、携帯も持てないときた。俺たちヤクザは現代の部落民だよ。人権なんてねえのさ。昔と違うのは、ヤクザがそんな状態でも誰も助けてはくれねえってことだ。部落差別には戦ってくれるやつがいた。だがヤクザにはそんな奴は誰もいない。

菊池 ……それは……確かに、そうかもしれないません。

土屋 それで十年ほど前にヤクザやめて、生活保護とって、あとは気ままな隠居生活さ。

今この楽しみは酒とパチンコしかねえ。……こんな話でいいのか？

川下 はい。十分です。貴重なお話ありがとうございます。

土屋 あとは好きに書いてくれや。こっちはいい暇つぶしにはなったけど、なんか疲れたわ。じゃあ、もう行くわ。

土屋、立ち上がる。

ふたりが止める間もなく、背を向ける。

川下 原稿が出来ましたら、またご連絡いたします。土屋さん、どうしてもここは書いて欲しいという部分はありますか？

土屋 ……自分の生きる場所を、自分らしく生きられる場所を求めてヤクザになっただけど、結局それもお上かみは許しちゃうくれなかった。俺たちなんて生まれてこなければいいと役人どもは思ってるのさ。俺たちに人間らしく生きる資格はもらえねえ。そこんところは書いてくれ…いや、やっぱいいや。先生の書きたいように書いてくれ。

菊井 あ、あの！（立ち上がって）土屋さんの受けてきた差別や迫害は、言葉にできないほど凄惨せいさんなものだったことは想像できます。でも…誤解を恐れずに言えば、ヤクザは一般市民からお金を巻き上げ、苦しめてきたんですよね？ それは事実としてあるんじゃないんですか？ 差別されたからって、一般人を恐怖で支配していいわけではないと思います。

土屋、ゆっくりと振り返り、菊井を見る。

その目は、怒りではなく哀れみをはらんでいる。

土屋 好きに思ってくれていいさ。姉ちゃんがそう思えば、そうだってこった。

菊井 ……あの。

土屋 でもよ、俺にはそう生きるしかできなかった。そういう奴らがいっぱいいた。そんな時代だったっただけだよ。じゃあな。

川下 ありがとうございます。

菊井 今日は本当にありがとうございます。また、お話を聞かせてください。

土屋、菊井に背中を向け、手だけを振って挨拶する。

片足を引きずりながら去っていく土屋を見送るふたり。

その背中が、時代の中で蓋をされてきた何かを背負っているのかもしれない。  
溶暗。

三場

川下の過去（九十年代初頭）。

川下が少年時代に住んでいたアパートの一室。

四畳半の狭い部屋には簡素な祭壇が置かれている。

その祭壇に向かつて、一心不乱に手を合わせている川下の母。

そこへ制服を着た川下ひとし（少年時代）が帰宅する。

川下（少年） ただいま。

川下が帰宅しても気づかず、お祈りをしている母。

諦めの溜息を吐いて、自分の部屋へ向かう。

数秒後、血相を変えて駆け戻ってくる。

手には空っぽの封筒を握っている。

川下（少年） 母さん！ 俺の机の上に置いてあった小説は？

母はお祈りをやめるが、祭壇を見つめた。

母 全部捨てました。あんなものを書いてはいけません。何度も言ったでしょ？

川下（少年） 捨てた？

母 小説なんて書いている暇があったら、もっとお祈りをしなさい。

川下（少年） ……あの話かくのに、一年以上かけてるのに、捨てた？ 全部？

母 神さまにお祈りすれば、すべてがよくなるんです。お祈りが足りなかったから、こんなことになってるのよ。いい加減、目を覚ましなさい、ひとし。

川下（少年） 目を覚ますのは母さんの方だろ？ そんなもんに祈って、何が変わるって  
いうんだよ？

その瞬間、凄いい形相で振り返る母。

母 なんてことを言うの、あんたは！ ここに来て謝りなさい！ 神さまに今すぐ謝りな  
さい！

川下（少年） ……（封筒を差し出しながら）金は、俺の貯めてた金はどこにやったんだ  
よ。

母 早く謝りなさい！ 悪いことが起こるわよ！ 神さまが守ってくれなくなるのよ！

川下（少年） 答えろよ！ 俺の金をどこにやったんだよ！ まさかまた……。

母 ……もちろん、教団に寄付しました。

川下（少年） は？

母 ひとしが小説ばかり書いて、お祈りをしないから。でも、これで安心していいわ。教  
祖様もひとしは大丈夫って言っていたから。

川下（少年） 何度目だよ。

母 さあ、早く来なさい。

川下（少年） 俺のバイトの金を勝手に寄付したのは、これで何度目だと思ってんだよ。  
母 お金なんかあってもろくなことにならないって、わかっているでしょ？ 神さまに奉  
げたぶんだけ、神さまが悪いことから守ってくれるのよ。

川下（少年） 神さまが悪いことから守ってくれる？ 笑わせんな。神さまが一番悪いこ  
とを運んできてんだよ！

母 なんてこと言うの、ひとし。いい加減にしないと、お母さん怒るわよ。

川下（少年） 俺が必死になってバイトした金を勝手に寄付し……眠い目をこすりながら  
必死に書いた小説を捨てて……怒ってるのはこっちだよ！

母 ……ひとしにもわかる日がくるわ。さあ、こちらにおいで。

川下（少年） 俺はお前みたいには絶対にならない。いもしない神さまに祈って、クソみ  
たいな教祖にすがって惨めに生きているお前なんか。

母（立ち上がって） 神さまを悪く言うのだけは許しません！

川下（少年） ふざけんじゃねえ！ こんなもの！

川下（少年）、祭壇にまつられている神棚みたいなものを投げ飛ばす。

母 ああああ、なんてことを！

慌てふためきながら、神棚を拾い上げ、祭壇に戻す母。

祭壇に向かって土下座し、額を畳にこすりつける。

母 申し訳ございません。どうか息子を許してやって下さい。私が苦勞をかけたばかり  
に、ひねくれものになってしまっただけです。

川下（少年）（母親を見下すような目で見つめながら） ……なんだよ、それ。

母 お母さん、後悔してるのよ。ひとしにもとても苦勞をかけてしまったって。会社が倒  
産して、家も取られて、こんな狭いアパートで暮らすことになって。でも、これからは  
全部やり直せる。お母さんが全部悪いの。悪かったのよ、母さんが……でも、どうすれ  
ばいいのかがようやくわかったの。これからはもう、苦勞なんてしなくてもいいから。

川下（少年）（苦しそうに胸をおさえながら） いい加減、目を覚ませよ。覚ましてくれ  
よ。そんなインチキ宗教信じたって、何もよくなりはいないんだよ！

母 そんなことを言っているから不幸になるのが、わからないのかい！

母、川下（少年）の頬をビンタする。

川下（少年） もうお前なんか知らねえよ！ ババア！

飛び出していく川下。

ゆっくりと明かりが落ちていくなか、サスが灯る。

川下 高校卒業と同時に家を出ました。母親には行く先は告げず、家出同然の状態でした。  
僕が家を出るとき、少しだけ驚いた顔をしましたが、それでもお祈りをやめることはあ  
りませんでした。それ以来、母には会っていませんし、連絡も取りませんでした。そん

な僕のもとに連絡がきたのが今から三年前。市役所からの死亡連絡でした。

時間は現代へ。

少年時代を過ごした四畳半。

色褪せた祭壇には母親の遺影と骨壺が置かれている。

その前にたたずむ川下。

やがて胡坐をかき、座る。

川下 母さん、そっちで親父とは再会したかい？ 葬式はあげなかったけど恨まないでくれよ。だって、普通の坊さんの葬式じゃ嫌がるだろうけど、教団葬は絶対にゴメンだったからさ……。そう家を出てからすぐ、家具もない風呂なしアパートで無我夢中で書いた短編小説が佳作を獲ってさ、俺は小説家になったんだよ。その時の編集さんが良くしてくれて、小さな仕事をまわしてくれてさ。その金で大学に行くことができたんだ。誰もが知ってる売れっ子作家ってまではないかなかったけど、それなりに売れっ子にはなつたんだぜ、俺。すげえだろ。なろうと思つたって、なれるもんじゃないんだから。神さまにお祈りしなくなつて、多額の寄付をしなくなつて、俺は自分の人生を手に入れることができたよ。……。なあ、母さん。バブルがはじけて、親父と一緒に頑張つてきた工場が潰れて、親父が首つって死んじやって、それで宗教にハマっちゃつたのは……。今になればその気持ちがよくわかるよ。あの頃の俺に、もつと優しや、力があつたら変わつていたのかもしれない。そう思う時もあるよ。でも……。でも……。やつぱり俺は母さんを許せない。本当に許せないのは母さんをそのかしたクソ教団だけど、そんなちよつと考えればオカシイとわかるクソ宗教にハマつて、唯一の息子である俺の人生をめちゃくちゃにした母さんを許せない。僕がSFにこだわった理由は、宗教と現実の否定から来ていたんだ。書いていた時はそんなことを気にしたことはなかったけど、今になつてみるとよくわかる。……。母さんの人生はどうだった？ 見捨てて出ていった俺が言うことじゃないけど。やつぱり気にはなるよ。作家としても、息子としても。会社が潰れて、親族からも絶縁されて、親父も死んで……。神さまに祈つたことで、救われたのか？ それならそれでいいんだ。何を信じるのかは、自由なんだからさ。……。今日、こうして母さんに会つてはつきりとわかつたよ。俺の書きたいものが、書かなくてはいけないものが。SFからはなれて、新しい物語を、現実に生きる人たちの話を書いてみようと思うんだ。できるかはわからない。でも、やらなくてはいけない。作家として、息子として……。

立ち上がり、母の遺影と骨壺を持つ。

部屋を出ていくのに合わせて明かりが落ちていく。

#### 四場

どこかのファミレス。

川下と菊井が向かい合って座っている。

菊井が原稿を黙って読んでいる。

テーブルの上にはそれぞれのドリンクが置かれている。

やがて読み終わった菊井が大きなため息を吐きながら、

菊井 はつきりと言わせていただきます。面白くありません。

川下 そう……だよ、ね。

菊井 取材したものをそのまま書いていただけです。これでは小説とはいえませんが、作品としての体をなしていません。

川下 自分でも分かっているんだけど……。困っちゃったね。

菊井 文章に関しては、さすがはベテラン作家と言えます。風景描写も素晴らしいし、登場人物たちも目の前に浮かび上がる様です。そこに何も不満はありません。

川下 ありがとうございます。

菊井 逆に言えば、この作品は、とても致命的な欠陥を抱えているということですよ。技術ばかりで中身はない。作者が何を書きたいのか、読者に伝えたいのかがまったく伝わってこない。

川下 ……迷ってる……というか、わからなくなってる。

菊井 先生、こんなことを言うべきではないのかもしれませんが、私はこの作品に編集者生命をかけています。編集長に啖呵きってゴーサインをもらってきたんです。これは本当は私個人の問題なのかもしれませんが、先生にもそのことは知っておいてもらいたいです。

川下 菊井さんが背水の陣で挑んでくれているのは、わかっているつもりだよ。

菊井 ぶっちゃけて言うのと、売れなくてもいいんです。小手先の技術なんていりません。魂に突き刺さってくる作品にしてほしいんです。編集長も首をたてに振ってくれる作品じゃないとダメなんです。

川下 厳しいな。そんなの、作家の理想そのものじゃない。自分の理想を作家に押し付けてくる編集は、うまくいかないよ。

菊井 ……それは……わかっています。つねに自問自答しているつもりです。理想を押し付けられているように感じたら、すいません。

川下 とにかくあがくしかない。僕はいつもそうしてきたし、たぶん、ほとんどみんなそうだよ。

菊井 私も精一杯のサポートをします。そういえば、最近、平等ってなんだろうって、ずっと考えているんですよ。男女格差をなくすってこともそうですけど、「平等」ってひとくちに言っても何が「平等」とするのかは難しいですよ。

川下 ちよっとSF的な思考実験を試みようか。仮に「真に平等な社会」が訪れたら、それは「生まれが全ての社会」ってことなんだよ。わかるかな？

菊井 もうちよっと詳しくお願いします。

川下 産まれたときから全てが同じ環境で育った人たちは、その差が生まれ持った遺伝的性質によるもので決定されてしまうという思考実験さ。例えば貧しい国では、いい家に

生まれ、栄養価の高い食事、高い教育を受けたものが有利だ。スポーツでも何でもね。  
菊井 それはわかります。

川下 貧しい国では生まれ持った遺伝子の性質……まあ仮に才能と呼ぼうか。才能よりもどんな家に生まれたかという「運」の要素が大きいです。どんなに優れたサッカーの才能を持っていてもまともに食べるものがない家に生まれてしまっただけ、その才能を開花させることができない。勉強もそうだよ。どれだけ遺伝的に頭がよくても、勉強できる家に生まれなかつたらその才能は無駄になってしまう。この不平等さはとてもわかりやすい。

菊井 世界的にはこの不平等さをなくしようと努力しているって感じですね。

川下 じゃあ次は社会的に真に平等な社会が実現したらどうだろう。みんながまったく同じ医療技術のもとに生まれ、まったく同じ家、環境、食事、衣料、教育を与えられて育つとしたら。

菊井 うわあ、なんかそれってディストピア感がありますよね。

川下 環境因子がまったく平等だったら、個人の才能っていうのは生まれ持った遺伝子の要素がもっとも強くなるはずなんだよ。サッカーが上手い子は、もう生まれもった遺伝子によるもの。だって、まったく同じ教育と食事、同じ環境下で育ってきたんだから。

これが真の平等だって言われたとき、何か違和感をおぼえない？

菊井 めっちゃモヤモヤします。

川下 まあ、これは思考実験でしかなくて、現実にはこんな完全に平等な環境ってのは実現できないから。

菊井 そうですね。

川下 平等って一口にいても、いろんな角度からの平等がある。最大公約数をとること  
が「真の平等」ではないってこと。結局はなんでもケースバイケースなんだよね。

菊井 ……たしかに、当たり前に使う「平等」って言葉ひとつとっても、突き詰めていくと膨大な時間がかかりますし、答えも出ないんですね。

川下 まあ、こんな感じで悩んでいるわけです。歳をとって知識が増え、選択肢が多くなればなるほど迷いが出るって……因果な商売だよ、物書きってやつは。

菊井 タイトルが空欄っていうのが、道筋が定まっていないうのを端的にあらわしてますよね。

川下 タイトルか……。なんか降りてこないんだよね。こんなにタイトルが決まらないのは長年の作家生活の中でもはじめてだよ。

菊井 きつとこの作品は、先生がSF作家として、乗り越えないといけない壁なんだと思います。

川下 それは……自分でもそう思っているよ。そして、現在のところ、乗り越えられるどころか暗礁に乗り上げていて感じ。あははは。

菊井 もう、笑いごとじゃありません。

川下 焦ったって、どうにもならないよ、菊井さん。のんびりはできないけど、気楽に行こうよ。次の取材、明後日だけ？

菊井 ……そうです。次の取材先でいい閃きがもらえるといいですね。

川下 ユーチューバーか。そうだった関係の人に会うのは始めてなんだよね。

菊井 私もそうです。かなりクセの強そうなので、ちよつと警戒してます。

川下 大丈夫だよ菊井さん。作家だってクセ強い人間しかいないから。



菊井 そうですね。ははは。

川下 今日はこのくらいにしましょうか。貴重な意見、ありがとうございます。

菊井 こちらこそ、ありがとうございます。

立ち上がる二人。

川下が去っていくなか、サスが灯り菊井が語りだす。

菊井 編集会議で編集長を半ば脅すかのようにこの本の出版を決めてからというもの、私も死に物狂いで差別の歴史の勉強しました。一般的には江戸時代の身分制度の制定が発端とされています。いわゆる「士農工商エタ非人<sup>ひじん</sup>」です。この身分制度は明治政府の「解放令<sup>かいはい</sup>」が出されるまで続きます。しかし、解放令が出され、全ての身分が平等になったと言われても実質的には身分制度は残ったままでした。正確にはエタ・非人に対する差別感情は消えることはありませんでした。そもそも明治政府は解放令を出しただけで政策としては何も行いませんでした。皇族華族取扱規則が定められ、平等というのは「天皇の下での平等」でした。そのまま世界大戦に突入し、戦後をむかえても被差別民部落問題は残ったままでした。熾烈な糾弾闘争の果てに一九六九年・同和対策事業特別処置法の公布が決定。これが俗にいう「同和利権問題」を生むこととなります。十年間の時限立法としてはじまった同和対策事業特別処置法は名前を変えながら二〇〇二年までの三十三年間継続され、十五兆円の国家予算が費やされたと言われています。…十五兆円という国家予算額は、五年前だったら「たいへんな金額」だと思つたことでしょう。でも今は「え？ 三十三年で十五兆円だけ？」と思つてしまいます。それは連日のように報道される政治家の汚職や不正な中抜き。果ては自国の民を見捨てた他国支援の額を見ているからです。総合経済対策の使途不明金額が十三兆円。コロナ対策の使途不明金額が十二兆円。これを目の前にして同和対策における十五兆円という額が大きすぎるとは、私には思えない。在日問題にせよ、同和問題にせよ、それに対しての救済法が制定されるのは、そこに「差別」があつたからに他ならない。それを是正できるのは「政治」しかない。たとえそこに「利権」が発生しようとも。けれども私はまだ、はっきりと同和対策が正しかったと言いつけることはできない。声を大にして差別問題を語る勇氣を持たない。どれだけ学んでも、足りないと言われる気がする。それは私自身が被差別民ではないという負い目から来ているのかもしれない。それが差別を語ることの恐ろしさなのだろうか。でも、私はそれと向き合うことに決めた。剣の達人になつてから試合に出ることはできない。戦いながら腕を磨き、少しずつでも前に進んでいくしかない。

五場

どこかの下町。

スマホをかざして動画を撮りながら金子が出てくる。

金子 えーと、今日はB県C市D町の部落地区に来ています。ここはすでに新興住宅街になっただけです。あつ、あそこに古いカバン屋と靴屋があります。こういうものがあるのは部落だった頃の名残りです。おつ、新しいマンションができるみたいですね。このマンションを買う人たちの中で、かつてここが被差別部落だったことを知っている人が果たして何人いるのでしょうか。そう、部落差別なんて、作られたもので、本当は存在していないんです。同和利権を生み出し、一部の人間が金儲けをするだけに作られたものなんです。それが本当の歴史です。僕は真実の歴史を伝えるために、こうして部落地区を散策し、動画をアップし続けているんです。

場所は変わり、どこかのファミレス。

金子と向かい合って座っているのは川下と菊井。

金子 川下ひとし……？ 知らないなあ。ほんとに作家さんなの？ 何冊ぐらい本出してるんですか？

川下 まあ、いちおう二十冊ほど。

金子 え？ 二十冊も出してるんですか。本屋に置いてあります？

川下 新刊コーナーにはないです。文庫ならたぶん一、二冊はあると思います。

金子 ふーん（飲み物をのみながら）。で、作家先生が僕に何を聞きたいんですか？ 日本

の歴史の真実ですか？ 違うんですよ？ どうせあなた方も作られた「差別」の歴史に毒された左翼主義者なんですよ？

川下 金子さんから見たら、そうなのかもしれませんね。

菊井 あの……金子さんはどうして部落地区をインターネット上にあげる活動をしているんですか？ 普段はふうのサラリーマンをされているんですよ。お金も時間もかかって大変じゃないんですか？

金子 休みの日は全部この活動に充てています。

川下 すごい情熱ですね。

金子 あつ、もしかして馬鹿にしています？

川下 そんなことはありません。気に障ったのならすいません。

菊井 その……金子さんの活動は、色んな団体から訴えられています。それに対してはどのようにお考えですか？

金子 その質問、何十回も聞かれましたよ。僕の答えはかわりません。強硬手段として訴えてくるというのはそこに暴かれたくない利権があるからです。隠したい秘密があるからです。控訴してくる同和団体は言います。勝手にばらすな。カミングアウトは自分たちです。それはマイノリティーの正当な権利だ。他人が無許可で秘密をあげくアウトイングは許さないって……そんな主張、おかしいと思いませんか？ 利権を守るために言っていると思えない。

菊井 ……それに関しては、私は何も言えないです。

金子 部落差別なんて本当はなかったんですよ。それは一部の特権者たちが作り出したものだったんです。だからそれを暴かれるとムキになって止めようとしてくる。ほんと醜悪です。

川下 これからもこの活動を続けていくつもりですか？

金子 もちろんです。マスコミは僕に対して無視か否定しかしてきませんが、ネットではかなりの支持を得ています。僕の活動を理解してくれる人がいるし、僕は真実を伝えていだけなんです。だからやめるつもりはありません。

川下 そうですか。わかりました。

菊井 金子さんの「真実」ってなんですか？ 何をもって「真実」だと断言しているんですか？

金子 それをあなた方に伝えなくてはいけない理由はありませんね。もう十分ですよ。失礼します。

金子、立ち上がり去っていく。

残されたふたりにしばしの沈黙。やがて、

菊井 ごめんなさい。ちょっと私、よくわからなかったです。

川下 いやあ、強烈だったね。でも、思っていたよりも理性的で理路整然としている人だったよ。

菊井 そうですか？ なんであんなに頑ななんですか？

川下 時に信念はどんな嘘よりもやっかいである。

菊井 なんですか？

川下 ニーチェだよ。信念って大切だけど、怖いよね。

菊井 わたし、差別は絶対になくならないって思いました。だってあの人の考えを変えることなんて、私にはできない。

川下 そうだねー。僕もそう思うよ。

菊井 先生はどう思ったんですか？

川下 うーん。さっきの金子さんと同和団体の関係ってさ、実はウインウインの関係だったりするんだよ。

菊井 え？ どういう意味ですか？

川下 同和問題が下火になってきて、世間から忘れられないように必死に活動している同和団体だけど、今となっては若い人からも「もう同和問題なんて語らなくていいのでは？」と言われてしまっている。ここにきて金子さんみたいなネット活動家が現れて、再び同和問題に火を点ける。これはもう同和団体からみたら願ってもない好敵手の出現なんだよ。陰謀論者からしたら、金子さんと同和団体は繋がっていると思っちゃうよね。絶対にそんなことはないけど。

菊井 なるほど。

川下 だからこの問題に関しては、僕は「静観」が正しいと思っているんだ。

菊井 高度に政治的な判断ってやつですね。

川下 それほど高度でもないと思うけど。

菊井 でも、目の前で行われているヘイトスピーチに耳をふさいでいるみたいで、何だか嫌な気分になります。

川下 インターネットをのぞけば、毎日膨大な量のヘイト発言であふれている。それって昔からそうだったものが視覚化されただけなのか、それとも、分断が進んでしまっているのか、どっちだと思えます？

菊井 え？ 分断が進んだって思うのが一般的のような気がしますが……。

川下 ほんとうに？ 出版社ではあまりないかもしれないけど、会社の上司の普段の会話が、今ではアウトになっている差別感でいっぱい、なんて話はよくあることだと思うけど。

菊井 うーん。先生は昔から、見えなだけで差別主義者がたくさんいたと考えてるんですか？

川下 差別主義者っていうのは、どこに視点をおくかが重要なんだよ。尊敬する恩師が、ある方向だけはとてつもない差別発言をすることだってある。でも、だからといってその人が真のレイシストなのかというと、それはまた別問題。例えば、歴史上の偉人だって、全方向において完璧な人間だったわけじゃない。博愛主義を説き、それを体現していた人だって身内には怒鳴り散らし、とても厳しい人だったという逸話もある。

菊井 だからといって、今の日本の現状を見て見ぬふりをすることはできません。

川下 もちろん。僕だってそんなつもりはない。でもさ、差別をなくすって、簡単なようで簡単じゃないんだよ。

菊井 それは、わかっているつもりです。

川下 例えば、話題にあがってくる「排除ベンチ」。公園などの公共の場でホームレスが寝っ転がれないように真ん中に仕切りをくっ付けたベンチだけど、あれに反対している人たちの大半だって、自分の家の前にホームレスが住みついたら警察に通報するんだよ。それを許容できないのに排除ベンチにだけ反対するのはなんておかしい話じゃない？ 僕はそう思うけどな。

菊井 そうですね。私も排除ベンチには反対ですけど、自分のアパートの空き地にホームレスが住みつくのは耐えられないです。防犯上もよくないと思いますし。でも、公園にだったら、ホームレスの方が寝ていても仕方ないんじゃないですか？ そこで寝かせてあげてもいいって思います。

川下 それって自分が子供を持って、公園で遊ばせるようになっても言える自信ある？

菊井 うう……ありません。すいません。

川下 いやあ、まあ、それが普通の反応じゃないかな。親にとって子供はもつとも大切で、害をなしそうなモノをできるだけ排除する。それは基本的な危機管理能力だよ。そこに本来、善悪はない。でもね、この「ホームレスが家の前にいるのは許容できない」は、「ゲイが嫌」とか「外国人は日本から出ていけ」と、ほんの紙一重しか変わらない考えなんだよ。

菊井 ……そんなこと言われたら、どうすることもできないじゃないですか。

川下 だからさ、ホームレスを許容する社会を目指すんじゃないかって、ホームレスを生み出さないと社会を指すことが重要なんだよ。とは言うものの「LGBTQを生み出さない社会」って発言は間違いなく差別だから。社会によって生み出されたものは、それを無くす方向にしたほうがいいってことかな？

菊井 そういえば、最近ホームレスなんて見ないですよ。みんなどこに消えたんですか？

川下 今はホームレスを見かけるとNPOの人たちが説得して、施設に入れて生活保護を受給させてるんだよ。

菊井 それって、そんなに悪いことじゃないですよね？

川下 菊井さんは貧困ビジネスって知ってる？

菊井 聞いたことはありません。具体的にどんなことをやっているのは知りませんけど。

川下 このホームレスの保護活動がまさに貧困ビジネスの一番大きな市場なんだよ。生活保護をピンハネするんだよ。末端の組織はそんなにだけど、それを束ねている人は寝て  
いるだけで何億円も入ってくるような状態になってるんだよ。

菊井 え？ そうなんですか……知りませんでした。それって警察とか行政とかが動かないんですか？ 大規模な摘発とかって聞いたことないですよ。

川下 これもさ、みんな触れたくない部分なんだよ。汚物の蓋をあけたくないんだよ。貧困ビジネスを摘発して、ホームレスはどうなるの？ 誰かが面倒見るの？ 誰も見たくはないでしょ。だから見て見ぬふりをしてるんだよ。

菊井 酷い話ですね。

川下 僕はさ、知り合いのツテで、このホームレスの収容施設を見に行ったことがあるんだよ。酷いもんだよ。もうウナギの寝床もいところ。四畳半をベニヤで三つに仕切って、そこを一部屋としてひとりずつにあてがっている状態だった。あんなんだったら刑務所のほうがマシじゃないかと思っただね。

菊井 それって……どうすればいいんですかね。

川下 簡単に答えが出せる問題じゃない。僕たちの社会は表面上はどんどん綺麗になっていくけど、見えないところでは昔よりも汚くなってしまった部分があるってことを忘れてはいけない。そしてその見えない川に落ちてしまったら、這い上がるのは容易ではない。そんな社会になりつつある。

菊井 恐ろしいです。

川下 とにかく考え続けるしかない。そして、自分にできることをやるしかない。

菊井 せめてみんなの理想がひとつだったら、いいんですけどね。

川下 いやいや。それこそが独裁国家のはじまりだよ。

溶暗。

六場

一九六〇年代初頭。

どこかの文化住宅の一室。

四畳半の部屋の中には森田和子（少女時代）と大石昇がいる。

大石 すまない、和子さん。僕にはどうすることもできなかった。本当にすまない（土下座をする）。

森田（少女） 頭をあげて、昇さん。昇さんが謝ることなんて何も無いじゃない。悪いのはわからず屋の私の両親のほうだわ。私、心底怒っています。昇さんに「エタは人間じゃない」なんて。あの人たちをもう私は親だと思わない。

大石 産んで育ててくれた両親をそんなことを言うものじゃないよ、和子さん。立派な人じゃないか。工場の社長さんなんだし。

森田（少女） 祖父から継いだ工場よ。立派でもなんでもない。

大石 それでも……そういう生まれも含めての話をされたんだよ。和子さんはおじいさんから継いだ工場の跡取り息子を産まなくてはいけない大切な存在なんだ。僕なんかはふさわしくないんだ……。

森田（少女） やめて！ どうして急にそんなことを言い出すの？ 仮に……跡取りを産まなくてはいけないとしても、昇さんの子供でいいじゃない。

森田（少女） どうして急にそんなに弱気になってしまったの？ お父様に言われたことを気にしているの？ あんなのちつとも気にすることは無いわ。

大石 そんなこと……気にしないことなんてできないよ。

森田（少女） 昨日まで人間は平等だって……どんな人間も生まれた時に貴賤の差はないって言っていたじゃない。

大石 でも……現実はどうじゃなかった。

森田（少女） その現実を変えていくんでしょ？ 私たち二人で。私、昇さんとだったらできるって信じている。

大石 和子さん。

森田（少女） 世の中なんて変わっていくわ。この前だってテレビで、もう戦後ではないって言っていたじゃない。これからは新しい時代になって、やがて部落差別なんてなくなると思うわ。そんなものを誰も気にしなくなる。それまで隠れて暮らしていればいいじゃない。

大石 そんなに……簡単なものじゃないんだよ、和子さん。もっともっと根深いものなんだ。

森田（少女） もう、これ以上何も言わないで……！

森田が大石の胸に飛び込む。

抱きしめる大石。

森田（少女） 心臓の鼓動が聞こえる。この音はみんな変わらないはずよ。私も、昇さんも……。

大石 そうだね、和子さん。

森田（少女） ねえ、このまま一緒に逃げましょう。私たちが知らない土地なら、誰も私たちの邪魔なんてしないわ。どこか遠いところで、ふたりでひっそりと暮らしましょう。大石 そうすることができたら……どんなにいいか。

森田（少女） お金なら心配しないで。私、お金がしまっている場所を知ってるの。半年ぐらいなら、働かなくても大丈夫な額を持ってこられるわ。

大石 そんなのダメだよ、和子さん。そんなことをしたら和子さんが警察に追われてしまう。

森田（少女） そんなの、私、かまわないわ。

大石 ダメだ！ 和子さんにはキレイなままでいてほしいんだ。

森田（少女） どうして！ どうして、私に「一緒に逃げよう」と言ってくれないの？ その一言で、私はあなたと一緒にどこにだって行ってあげるのに。

大石 和子さん……。わかった。明日の夜、この町を抜けて、どこか遠い所へ行こう。もうそれしか、僕たちふたりが結ばれる方法はないことがわかったよ。

森田（少女） ほんと！ 嬉しい。わかったわ。今すぐ家に帰って荷物をまとめてくるわ。大石 気づかれないように慎重にね。決して風呂敷いっぱいの大荷物になんてしちゃうダメだよ。あと……お金を盗んでくるのもダメだ。お金は僕がなんとかする。

森田（少女） 大丈夫。気づかれないようにできるわ。わたし、昇さんと一緒だったら、どんな暮らしだって耐えてみせる。昇さんのそばにいられば、私は幸せなんです。

二人、きつく抱き合う。

森田（少女） 明日の夜、荷物を持ってここに来ます。

大石 待ってます。和子さん。

名残惜しそうに部屋を後にする森田（少女）。  
残された部屋でひとり、コブシを握りしめる大石。

大石 すまない、和子さん。本当にすまない……僕は……どうしようもなく弱い人間なんです。

明かりがゆつくりと落ちていき、サスが灯る。

森田（少女） 次の夜、荷物を持って向かった先には、人だかりができ、何人もの警察がいました。私は無我夢中で人ごみをかきわけ、昇さんの待つ部屋に向かおうとしましたが、警察に止められてしまいました。昇さんが警察に捕まったのだと思い、私は警察官を大声で罵りました。しかし、真実はもっと残酷でした。私が去ったすぐ後、昇さんは遺書を書き、首を吊って死んでしまいました。遺書には「叶うことなら来世と一緒に殺りたい」と書かれていました。昇さんは……殺されたんです。部落差別というものに殺されたんです。人間を生まれで分ける醜い思想に。

時は現代へ。

同じ文化住宅の一室。

部屋の中には年老いた森田がちゃぶ台の前に座っている。その向かいに座るのは川下と菊井。

菊井 それで……ずっと、独身を貫いてこられたんですね。

森田 まあ、貫いてってほど、信念をもっていったわけじゃないの。誰にも言い寄られなかったっただけ。けどまあ、言い寄られたところで結婚はしなかったと思います。あれ以来、そういった気持ちを抱けなくなりました。私の心の一部は、あるとき昇さんにもっていかれてしまったの。

菊井 昇さんのこと、愛していらしたんですね。

森田 あの後、両親とは五年間ひとことも口を聞きませんでした。でもある日、泣きながら土下座されて……それでまあ、仕方なく和解したんです。工場は結局潰れました。跡取り云々関係なく、時代による淘汰でした。

川下 ずっとここで、おひとり暮らししているんですか？

森田 なんか、はなれる気にはなれなくて。昇さんの思いでの場所ですから。部落差別という過去の因習を否定しておいて、私も結局、過去に囚われ続けた人間なんです。

菊井 そんな。それとこれとは別のお話ではないですか？

森田 いいえ。おんなじことです。若いあなたにはまだわからないかもしれないけど。

川下 昇さんが他界されてからその後、ずっと率先して部落解放運動に参加されていたんですね。

森田 ええ、そうです。解放運動の方たちは、被差別民ではない私を快く受け入れてくれました。両親はいい顔はしませんが、何も言ってはきませんでした。私が活動資金をねだれば、黙って出してくれました。

菊井 ご両親にも、良心が咎める部分があったはずですよ。きっと。

森田 それはどうでしょうか。結局死ぬまで、昇さんに対しての謝罪の言葉は聞けませんでした。

川下 森田さんのような体験をされた方は、当時とてもたくさんいらっしやっただけ聞いておられます。今では想像もできないです。

森田 そうです。私も解放運動に参加して知ったのですが、六十年代では、被差別民と一般人が結婚できないのが当たり前。そのことを苦に自殺した人は、それこそ何人もいました。

菊井 そうなんですね。

川下 今日は森田さんに、失礼を承知でお聞きしたいことがあります。

森田 そうですね。戦後八十年をまもなくむかえようとする現代……部落差別はなくなったんでしょうか。

森田 ……解放運動の成果は確実にあったと思います。暮らしは楽になり、職業差別も減ったと思います。今では一般人とまったく同じになったかと問われれば……その答えは難しいです。新しい差別が次々と生み出され、貧富の差や社会的格差、男女格差なんかは逆に広がっているように思います。

川下 いわゆる同和利権に対してはどう思っていますか？

森田 我个人、被差別民ではありませんでしたので、いわゆる同対法の恩恵は一切受けて



はおりません。利権をむさぼっている人間は確かにいました。それは認めます。でも、当時の凄惨極まる差別に対して、国が救いの手を差し伸べるのは当然のことで、その恩恵を被差別民が受けるのも、当然の権利としてあったと確信しています。

川下 ありがとうございます。

森田 そういえば……最近、運動仲間から聞いたんですけど、部落の場所を公開してまわっている若い方がいらしているんですね。それによってまた、同和問題に対して差別意識を持った人がうまれていくとか。

菊井 そうですね。残念ながら、そうですね。

川下 そういう方に対して、森田さんはどう思われますか？ 彼らは「同和差別などなかった」と言っていますし、旧同和地区を開示することは自由だと言っています。

森田 先ほども言いましたが、私自身が被差別民ではありませんので、解放運動における「被差別民のみが被差別民である苦しみがわかる」というのは、私には当てはまりません。同和地区の一方的な開示は確かに今まで解放運動を行ってきた人にとって、真つ向から対立する行為です。でも……。

川下 ……でも？

森田 同和という言葉を知らなくなることが差別をなくすことかというのと、私は疑問です。誰もが自由に同和問題を語れる世になることが同和差別をなくすことだと思っ  
ています。ここは運動している人とは違う意見なのかもしれません。

川下 ……貴重なお話、ありがとうございます。

森田 同和地区出身者であるというだけで、何かのハードルや、差別になるというのは絶対に間違っています。でも、同和地区は同和だけのものであるかというのと、それもまた間違った認識だと思います。

菊井 そういった差別があったことを知った若い子が、そのことを意識せずにその人たちと接するということも、難しいことだと思うんです。

森田 それは……そうだとは思いますが。人の心というものは、本当に難しいですね。私たちが言い続けてきたことはひとつです。そんな人間も同じ人間。それを忘れずに接して欲しいと……。

川下 本当に、その通りです。そんな簡単なことが、僕たちにはできない。

菊井 私たちはどうすればいいと思いますか？

森田 相手を知ること以外に、できることなどないと思っています。対話の先にしか、平等はありません。

森田 あとのことは若い人たちが判断し、決めていけばいいと思っています。色んな意見があつていい。いろんな人がいていい。そうでなければいけない。今はスマホひとつで、簡単にいろんな人と繋がることのできるんでしょう？ 私の時代では考えられないことだわ。

川下 そうですね。でも、便利になったからといって、それがそのまま自由や平等に繋が  
るわけじゃないんです。

菊井 色んな人が平等に生きられる世の中。それって、簡単そうで、なかなか難しいこと  
なんですよね。

森田 私がお話できることはそんなところかしら。参考になりました？

川下 ええ。とても。ありがとうございます。

菊井 やはり、本で読むのと、実際の体験をした人の口からお話を聞くのでは、まったく

言葉の重みが違いました。森田さんのお話、心に深く染みわたりました。本当にありがとうございました。

ふたり、深々と頭を下げる。

森田 私はもう十分に生きました。あとはお迎えがくるのを待つだけの日々ですよ。向こうで昇さんが待ちくたびれていることでしょうか。あとは若い人にお任せいたします。

微笑みを浮かべながら、森田は天井を仰ぎ見る。  
溶暗。

## 七場

舞台中央に逆三角形をした陰謀論チャートが大きく映し出される。  
両端に立つ川下と菊井。

菊井 新型コロナウイルスの世界的パンデミックは、私たちの社会を大きく変えました。それは疫病による生活様式の変化だけではありません。むしろ、それは一過性のもので、いずれは回復するものです。問題はインターネットによるデマの拡散。それに便乗した陰謀論ビジネスの加速でした。このチャートの一番上にあるものが、もつとも社会的に悪質なQアノンや反ワクチンなどの陰謀論。下にいけばいくほど無害になっていきます。川下 SNSは東日本大震災の時に終わったと言われました。あの時、多くの情報がインターネットに上がり、善意のもとに拡散されました。しかし、それはウソと真実がないまぜになった情報で、それを見分けることが容易ではありませんでした。SNSの価値というのはあの災害で終わったという識者の発言は正しかったと思います。

菊井 小学生のなりたいたい職業の上位にユーチューバーがあがるほど、ネット配信者が爆発的にふえました。一億総表現者時代と言われるようになりました。果たしてそれは本当に表現者であるのでしょうか。出版物を出すには、多くの人の目を通ります。その中で倫理的に問題があるものや、表現として未熟なものが淘汰されていきます。一億総表現者時代には表現としての淘汰は「再生回数」に集約されていき、「再生回数」を稼ぎ出すために、過激なことや倫理的に問題があることをする表現者が増えました。昔ではそれは表現者として認められなかった人たちです。

川下 インターネットというものができたばかりの時代。まだパソコン通信なんて呼ばれている時代です。その頃、ネットの海には決して口には出せない言葉や行動というものを出し出す場所でした。変態趣味を持つ人、実の兄を好きになってしまった人など、そういった言葉や行為を受け止めてくれる場所だったのです。そこに金銭など発生しませんでした。そこに広告をつけたり金銭のやり取りができるシステム自体がなかったのです。「完全匿名・書き込み自由・削除なし」の掲示板が誹謗中傷やレイシストの集まりになっていくことは必然だったのでしょうか。僕はそうは思えません。実際に、そういった方向に誘導している人間がいたことを示唆する研究結果もあります。「完全匿名・書き込み自由・削除なし」の掲示板が世界にひとつあってもいいと僕は思っています。けれどそれがレイシストの温床になるのなら、やはり誰かがコントロールするべきだとも思いません。でも、そのコントロールは、人間の手で行う限り、完全に中立であることは不可能です。そしてもつと悲しいことはレイシズムや陰謀論をふりまいている連中が「信念」から行っているのではなく、「商売」として行っているということです。それに乗っかってしまい、レイシズム発言や陰謀論を拡散してしまう人を愚かだとも思いますが、それは、たまたま自分がそういった知識を持っているだけだということも忘れてはいけません。もつとも憎むべきは、そこに誘導し、巨万の富を得ている者たちです。

菊井 私の祖母は「騙すより騙されたほうがいい」という人でした。今や振り込め詐欺が常態化し、何を信じたらいいかかわからない世の中になってしまいました。振り込め詐欺に騙された人は愚かな人なのでしょうか。私にはそうは思えません、毎日会社に通い、言われた仕事をこなし、テレビを見ながら家族と過ごし、小さなことに一喜一憂する。そんな人が普通に暮らせる社会というものが、本当に必要な社会だと思っています。老

人や子供が何も考えることなく、安心して過ごせるようにするのが、社会の目標であり、為政者の責務です。騙されたものを愚かだと言うのは容易いことです。何かに騙されないうで生き続けることなんてできるのでしょうか。

川下 いまや僕たちは、何にお金を払っているのかわからない世界に生きています。無料動画サイトを見れば、そこに流れるCMなどで、僕たちは何かよくわからないものにお金を落としていることになりました。それはもしかしたらレイシズムや人種差別に加担しているのかもしれない。これはもう、インターネットにつなげるだけで起こっていることで、これに加担せずに生きていくことなど今の僕たちには不可能でしょう。昔はもつとわかりやすかった。自分の給料が何を作ったことによって支払われ、自分が買ったお金がどういった人に届くのか。今ではもはや、それを気にする人すら少なくなりました。資本主義の限界を唱える学者もいます。それは富の不均衡だけではなく、経済の不透明化も大きな問題なのだと思っています。

菊井 差別が少しでもなくなればいいと思っています。でも、それと同時に、自分自身も幸せになりたいと思っています。自分が幸せになるために誰かを踏みつけないといけない時、私はどうしたらいいのでしょうか。自分ではまったく気づいていないのに、誰かの尊厳を踏みにじってはいないか。そう考えると、怖くて一歩も動けなくなります。考え続けるのは正直辛いです。学び続けるのは苦しいです。何も考えず、心赴くままに生きていけたらと思うずにはいられません。でも、それは本当に幸せなんでしょうか。私にはわかりません。私たちが幸せに生きていける道なんて、本当にあるのでしょうか。

溶暗。

八場

土屋の住むアパート。

古ぼけた四畳半の部屋に敷かれた布団に土屋が寝ている。  
布団のまわりには空のペットボトルや弁当容器が散らばっている。  
その横に座る川下と菊井。

土屋 すまねえな。わざわざ来てもらって。場所はすぐにわかったか？

菊井 はい。役所の人の案内が丁寧でしたので、迷わず着くことができました。

土屋 そりゃあ、よかった。(身体を起こそうとして) いててて。もう玄関まで出迎えることすら難儀な身体になっちゃまってよ。

川下 (介助しながら) 大丈夫ですか？ 無理に起きなくてもいいですよ、土屋さん。

菊井 お体のほう、よくないんですか？

土屋 末期の肝臓がんだっていうんだから、まあよくはないんじゃないかねえか。あとは死ぬのを待つだけよ。

菊井 そんな……。

土屋 ヤクザもんなんで、みんな滅茶苦茶やってた奴ばかりだったから、俺はだいぶ長く生きたほうよ。仲間はみんなあの世にいつちまってる。

川下 手土産持ってきたんですけど……どうしましょう。

川下が手に持っているのは日本酒の瓶。

土屋 おおお、酒か。一カ月前の俺だったら、喜んで受け取ったんだけどよ、悪いな、先生。最近、何喰っても味なんてしやしねえんだ。酒も飲みたいと思わねえ。

川下 そうですか。じゃあ、持って帰ります。

菊井 入院はされないんですか？

土屋 どうにも病院つてのが好きになれねえ。わがまま言っつて看護婦のねえちゃんを困らせるのも何だしよ。無理やり帰ってきたよ。

菊井 でも、何かあつたら、どうするんですか？

土屋 覚悟はできてらあ。生まれてきたときもひとりだったんだ。死ぬときもひとりでいいさ。

川下 あれ、それってちよつとカッコつけてますよね。

土屋 先生、最後にカッコぐらいつけさせてくれよ。ははは……げほっ (咳き込みだす)。

菊井 (鞆の中からペットボトルを取り出し) 水、飲んでください。

土屋 すまねえ……ありがとよ。

川下 それで……土屋さん、どういった話があつて僕たちを呼んだんですか？ いや、別に寂しくて話し相手が欲しかったとかでもないんです。

土屋 そんなじゃねえよ。なんだろうな……死にかけの老人の気の迷いだと思つてきいてくれりゃいい。

川下 はい。

土屋 死ぬ前にどうしても先生に聞いてみたいことがあつてよ。俺は部落差別を受けるのが嫌でヤクザになった。それつてのは差別から逃げたことになるのか？ 正面から戦っ

たほうがよかったのか？ 俺は弱かったのか？

川下・菊井 ……………。

土屋 正面から戦ったやつも俺の村にはいた。だが俺にはできなかった。戦っても戦っても、せいづらは石を投げられ、罵られる日々を送っていた。俺はヤクザになった途端、誰からもバカにされなくなった。それは逃げたことになるのか？ 俺が俺として胸を張って道を歩けるようになったことは、そんなにも悪いことだったのか？

菊井 それは……。

土屋 俺には何も信じられるものがなかった。戦争が終わってすぐに生まれた俺たちは、信じられるものは何もなかった。親父もお袋も国も人も何もかも信じてはいなかった。俺たちはただの消耗品として生まれ、死ぬまで憎悪を浴びながら死んでいくしかないと思っていた。ああ……ヤクザにならずに、どっかの宗教にでもはいりやよかったのか？ そういえば、そういう奴もいたなあ。名前、なんて言ったっけ？ 何も思出せなねえ。

思い出に浸っているのか、土屋は目を閉じ、恍惚な表情を浮かべる。

菊井 大丈夫ですか、土屋さん。無理しないで、横になったほうがいいんじゃないですか

川下 逃げたんだよ……！

菊井 ……え？ 先生？

川下 お前は逃げだよ！ 楽な方に逃げたんだよ！

土屋 (目を見開く)。

菊井 ちょっと、先生。

川下 最後だからはっきりと言ってやるよ。言って欲しいんだろ？ お前なんてタダのクズだ。ヤクザなんてどんな理由をつけたって社会のゴミなんだよ。クズがクズであることに言い訳しているだけなんだよ！

菊井 先生、落ち着いて下さい！

菊井、川下をなだめようと手を差し出すが、川下はその手を払い落とす。

川下 いまさら許しを乞いたいのか？ ふざけんじゃねえよ！ 許しなんか乞うんじゃないやねえよ。どうしようもなかったんだろ。それしか選択肢はなかったんだろ？ だったら胸を張って逃げたことを言えばいいんだよ。無様に逃げたって、最後まで笑って生きたもんの勝ちだろ？ 人生ってそういうもんだろ？ 正しく生きてる奴が偉いのかよ！ 正しく生きれる環境に生まれたってだけじゃねえのかよ？ そんなもん俺は認めない。どんなに間違っているとしても、どんなに醜くても、最期のときは生きてきたことを認めてやらなきや……。

菊井 ……先生……。

川下 死ぬのを待っているだけの惨めな老人に何が言えるって言うんだよ。生まれ落ちた命の前に、何も言えないのと同じじゃねえか。俺には何も言えない。何も出来なかった……何も……。

土屋 先生……先生！

川下 ……。

土屋 もういいよ、先生。あんたの言いたいことはわかった。

川下 (我にかえり恥ずかしくなりながら) すいません。大きな声を出してしまつて。

土屋 大丈夫、大丈夫。死にかけの耳にはちようどよかつたよ。

川下 その…：なんか言いすぎました。すいません。

土屋 いや、そんなことはねえ。ズバツと言つてくれてすつきりしたよ。俺は別にキレイごとが聞きたくて先生を呼んだわけじゃねえんだから。

川下 (菊井に) ごめん。びつくりしたよね。

菊井 私は、大丈夫です。ちよつと驚きましたけど。先生も怒鳴ったりするんだなつて。

川下 いやあ、お恥ずかしい。

土屋 なんか胸の奥がすつきりしたよ。これでいつお迎えがきても後悔はねえな。

川下 冗談はよしてください。

菊井 そうですよ、土屋さん。またお見舞いにきますから。

土屋 …：少し横になるわ、先生。すまねえが、今日はもう帰つてくれ。

川下 わかりました。お邪魔しました。お大事にしてください。

立ち上がる川下と菊井。

土屋 ありがとうな、先生。あんたの本を読むことはできねえと思うけど、あんたに会えてよかつたよ。

土屋が川下に向かって手を差し出す。

その手を握りしめる川下。

ゆつくりと明かりが落ちていき、サスが灯る。

川下 それから一週間後、土屋さんはこの世を去りました。誰にも看取られることなく、自宅で亡くなつていくという最期でした。あの日、僕が土屋さんに激高したのは、看取ることをしなかつた、亡き母の最期に土屋さんの姿が重なつたからでした。あまりにも容赦のない、そして一方的な僕の暴言を、土屋さんは静かに受け止めてくれました。社会的な成功に何の意味があるのでしょうか。選択できる範囲がとて少ない状況に生まれ、その中で必死に生きてきた人でした。しかし、哀れみを示すことは間違いだと思ひます。あなたの選択は正しかつたと賞賛もできません。本当だつたら、ただ黙つてうなずいていけばよかつたのでしょうか。弱いということが悪いことではない。偽りの神さまに縋ることではか生きていけなかつた母は、決して悪い人でも愚かな人でもなかつたのです。それを気づくのに、何十年もかかるなんて…：僕もやつぱり愚か者なんでしょう。

九場

どこかのファミレス。

川下と菊井。

菊井は喪服姿で原稿を読んでいる。

菊井 いいです。すごくよくなったと思います。これならいけそうです。

川下 売れる？

菊井 それはまた別の話ですね。

川下 えー、そこは編集者として「売れる」って行って欲しいな。

菊井 はじめにも言いましてけど、忖度はしませんから。でも……。

川下 でも？

菊井 仮にまったく売れなくても、私はこの本を出したことを後悔しません。胸を張って世に送り出せる本になったと思います。先生、ありがとうございます。

川下 いやいや、お礼を言うのはまだ早いって。完成してないんだから。

菊井 そうですね。あはははは。

川下 そういえば、どうだった、土屋さんのお葬式。行けなくて、ごめん。

菊井 葬式はあげていません。いわゆる直葬というやつです。土屋さんはまったく身寄りがない方だったので、火葬代だけ私が出して、火葬にだけ立ち会いました。お骨は市にお願いしました。

川下 せめて火葬代、半分出すよ。出させてほしい。

菊井 いえいえ大丈夫です。自分で決めたことですから。これも何かの縁かと思いついて。

さすがに葬式までは私の財布では無理でしたけど。

川下 まさに呼ばれたって感じだよな。なんとなく思い立って尋ねて行ったら、玄関にうつ伏せで亡くなっていたんでしょ？

菊井 そうです。玄関開けたら倒れていて。すぐに救急車を呼んだんですけど、その時点でもう……。

川下 警察にいろいろ聞かれた？

菊井 事情を話して、金銭的なものも何もなかったんで、三十分ほどで解放されました。

それよりも福祉課の人の話が長かったです。

川下 それって、引き取り手の関係？

菊井 その通りです。まあ、袖振り合うも他生の縁かなと思いついて……。

川下 火葬代だけは出したと。

菊井 さすがに遺骨の引き取りまでは違うなと思いついて。中途半端だなど、自分でも思いついて。

川下 いやいや。それで十分だと思うよ。こういうのは金銭事情が一番大きなハードルだけど、最終的には気持ちの問題だからね。

菊井 どんな人間であれ、亡くなってしまふことは悲しいですね。

川下 そう……言える菊池さんは、ヒューマニストだね。

菊井 そうなんですか？ それって普通のことなんじゃないんですか？

川下 みんながそう思えば、世界はもっと平和だろうね。かつてのキリスト教徒は、異教徒は人間じゃないってことで現地人を虐殺しまくったんだから。



菊井 私、自分では博愛精神が薄いほうだと思ってました。けど、先生とこの本を作って  
いくなかで、少しだけ……人を愛せるようになった気がします。

川下 あい……ときましたか。僕は……少しは成長できたのかな？

菊井 先生もかわりましたよ。なんか、すつきりしました。

川下 自分なりの答えが……多少なりとも見つかった……のかな。

菊井 ええー、それって聞いてもいいですか？ とても気になります。

川下 「何もわからない」ってことと「なるようにしかならない」。

菊井 なんですか、それ。それが答えなんですか。禅問答じゃないですか。はぐらかさな  
いでください。

川下 そうだなー。ほんの少しだけ、他人の弱さを認められるようになったってこと、か  
な。

菊井 今までは他人に厳しかったってことですか？ そんなふうには感じませんでしたけ  
ど。

川下 それは他人に興味がなかったから。自分が作家として生き残っていくのに精一杯だ  
った。この世の中を渡り歩いていくことに必死で、自分より劣っているやつを、努力で  
きないやつを心のどこかでバカにしていた。

菊井 それは……クリエイターとして生きている人は、少なからずそういう考えが当たり  
前だと思います。だって、作家として生き残っていけるのはほんの一握りの人間で、努  
力するのが当たり前で、努力をしても報われない。けど、努力をやめたらその瞬間に落  
ちていく。そんな世界ですから。

川下 いやあ、自分で選んだ道とはいえ、言語化されるとかなりエグい世界だよな。

菊井 まあ、小説や漫画の世界もウェブで気ままに発信することができるようになりまし  
たから。昔よりは血で血を洗うような世界ではないですけど。

川下 その分、専業でやっていける人は減ったよね。僕もいつまで専業でいられることや  
ら。

菊井 この本で新境地を開いたんですから、あと五年はいけますよ、先生。

川下 え？ 五年は短くない？

菊井 厳しい業界ですから。ふふ。

川下 いやあさあ、三十過ぎてからは歳をとったって、いいことなんてひとつもないと思  
ってたけど、歳を取ることではか得られないものってあるんだね。

菊井 五十肩とかですか？

川下 ……怒るよ。

菊井 冗談ですよ。

川下 菊井さんも、なんていうか、一本芯が通った感じになりましたね。あと、よく笑う  
ようになった。

菊井 え？ わたし、そんなに愛想が悪かったですか？

川下 愛想が悪いつていうか、感情をあまり出さないようにしている印象だったね。

菊井 ……そうですね。先生と会ったときには、自分の殻を破りたいって、必死にあが  
っていた時でしたから。編集者になつて十年。胸を張って世に送り出した本はあるの？ つ  
て、いつも自分に問いかけてました。

川下 この本が、そうなつてくれて嬉しいよ。(インタビュアー風に) どうですか、今の気  
持ちは？

菊井 不思議なもので、今はそんなこと、どうでもよくなっています。ただ私のベストを尽くせばいいんだって。今はそう思うようになりました。

川下 次はどんな本を出すの？

菊井 新人作家と組んで、ジュブナイルものを出そうと思ってます。

川下 へえ、面白そうじゃない。

菊井 さっそくこのあとその作家さんと打ち合わせなんです。(腕時計を見て) あっ、もうこんな時間なんだ。じゃあ、先生、私そろそろ失礼いたします。

川下 はい。お疲れ様でした。僕はまだ少しここにいますよ。初校、待っています。

菊井 カバーデザインも上がってきたらお見せします。

立ち上がる菊井。

川下に背を向け、去ろうとした菊井が振り返る。

菊井 そういえば、タイトル、とてもいいと思います。『水平線はもう見えない』。

川下 ありがとう。

菊井 分断が進む社会のなかで、まっすぐな水平線を目指すのではなく、新たな価値観をさぐる。SF作家が書く、現代小説って感じて凄くいいです。

川下 売れる？ 売れて欲しいな。

菊井 ……それは、神のみぞ知るってところですね。じゃあ、お疲れ様です。

川下 お疲れ様。

菊井の背中を見送る川下。

コーヒーを飲みながら、机の上に原稿を広げる。

溶暗。

十場

どこかの街のスクランブル交差点。  
信号が青になり、幾人もの人々が一斉に舞台を横切っていく。  
みな手にはスマホを持ち、その画面を注視している。  
ふと、何かの瞬間で、みなが立ち止まる。  
そして、ゆっくりとスマホをから顔をあげ、客席の一点を見つめる。  
ある人は嬉しそうに、ある人は哀しそうに、ある人は無表情に、ある一点を見つめる。

そんな誰もが見つめてしまう何かは、その社会にあるのか。  
それを探し続けることが、私たちに課せられた使命である。  
幕がゆっくりと降りてくる。

舞台上の人々は一点を見つめたまま動かない。  
あれほどまでに夢見た水平線はもう見えない。  
海は分断され、ひとつではなくなってしまった。  
だが、水平線に変わる「何か」がこの世界にはきつとあるはずだ。  
それを探し続けることを私たちは誓う。  
いつまでも。  
決して諦めることなく。

終劇